

島田陣屋遺跡

調査の経過 島田陣屋遺跡は、新城市野田字西郷に所在する。本遺跡は豊川の右岸に形成された低位段丘の末端に位置し、現在の豊川までは約150m離れている。遺跡の標高は約26mから31mで、遺跡東南に広がる沖積平野との比高差は約3mを測る。島田陣屋は、1625年（寛永2年）に島田成重が3000石の知行を受けたのが始まりで、1868年（明治元年）に明治政府の命令で建物が取り壊されるまで存続した。

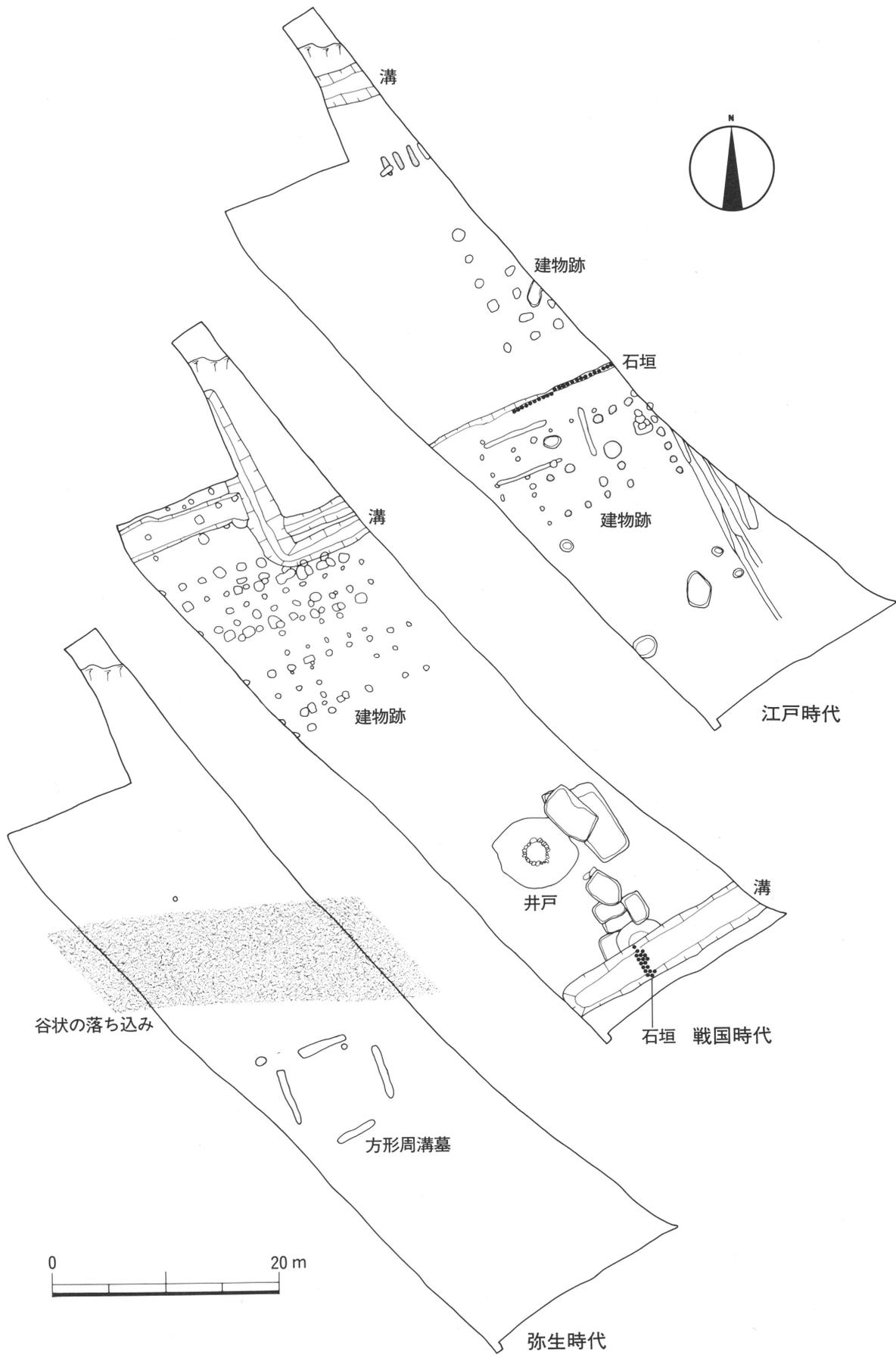
発掘調査は、野田城大橋建設に際する橋梁改築に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、調査面積2,682㎡のうち昨年度は1,000㎡、今年度は平成5年7月から12月にかけて1,682㎡を調査した。（神谷知幸）

調査の概要 今年度の調査では、弥生時代後期の方形周溝墓、戦国時代の溝、建物跡、井戸、土坑、江戸時代の石垣、溝、建物跡、廃棄土坑、埋設甕等の遺構が検出された。遺構は検出されていないが、弥生時代中期の土器、須恵器も出土している。

遺跡の基本層序は、調査区北半では上層から暗褐色土層（耕作土）、黒色土層（しまりのあるシルト層で、豊川流域にみられるいわゆる黒ボク層）、黄橙色土層（基盤、上位はしまりのあるシルト層で下位は礫を含む砂層）である。調査区南半は、江戸時代の削平を受け黒ボク層は遺存しておらず、暗褐色土層下に黄灰色土層、黄褐色土層（近世の整地層）が堆積している。また、調査区中央よりやや北側では、基盤層が低く落ち込み、谷状の落ち込みが東西に走っている。この落ち込みには黒ボク層が厚く堆積し、最も厚いところで約1.2mを測る。昨年度調査区の北部で検出された後背湿地状の「落ち込み」と同様のものであろう。



第1図 島田陣屋遺跡調査区位置図 (S=1/5000)



第2図 主要遺構配置図 (S=1/500)



方形周溝墓



方形周溝墓土器出土状況

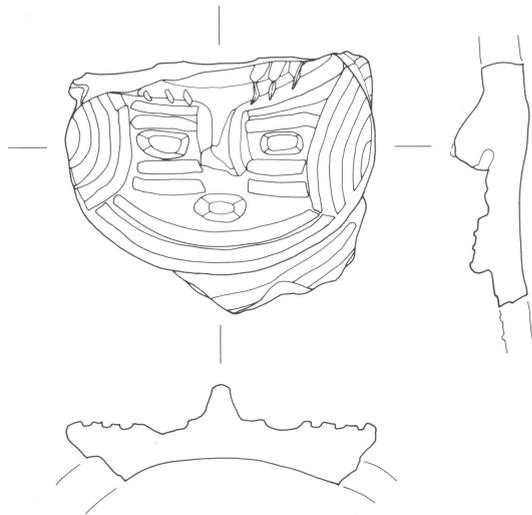
弥生時代 弥生時代の遺構としては、調査区中央で方形周溝墓が1基検出されている。周溝の四隅が切れるタイプで、規模は一辺約9mを測り、溝は垂直に掘られている。墳丘部は削平を受け遺存しておらず、主体部等は確認できなかった。東、南、西側の周溝からは、それぞれ供献土器の壺が出土しており、土器の年代からこの方形周溝墓は弥生時代後期の欠山式期に属すると考えられる。また、北側の周溝からは、人面付土器が1点出土して

いる。顔面部分のみ遺存しており、鼻と眉はT字状の粘土紐を貼り付け、目と口は太く浅い沈線で表現されている。顎と頬には弧状の沈線が巡らされ、顔面には所々赤彩が残っている。人面付土器の年代観は、当遺構出土の他の土器とは一致しない。当遺跡では弥生時代中期に属する土器も出土しており、この時期に帰属するものであろう。

他に弥生時代の遺物は、調査区中央部の谷状の落ち込みに堆積した黒ボク層中より欠山式を主体とする土器が出土している。

戦国時代 調査区北部と南部で区画溝が検出されている。北側の溝は断面箱形で、幅2.8m、深さ1.7mを測り、南北に走りL字状に屈曲し東へのびる。この溝の西側には幅2.7m、深さ0.5mの浅い溝が走っている。これらの溝からは、15世紀から16世紀に比定される常滑産甕、鍋、土師器皿、瓦器、輸入陶磁器（青磁・染付）等の遺物が出土している。南側の溝は、幅3.7m、深さ1.5mを測り、調査区西端で立ち上がることから出入口の存在が推定される。この溝は西側を埋め側面に石垣を築き、出入口部分を拡張した状況が確認されている。

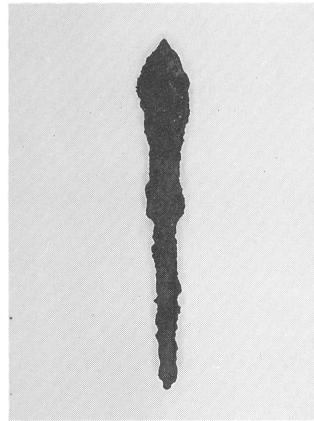
溝で区画された範囲では、複数の掘立柱建物、井戸、土坑等の遺構が検出された。建物



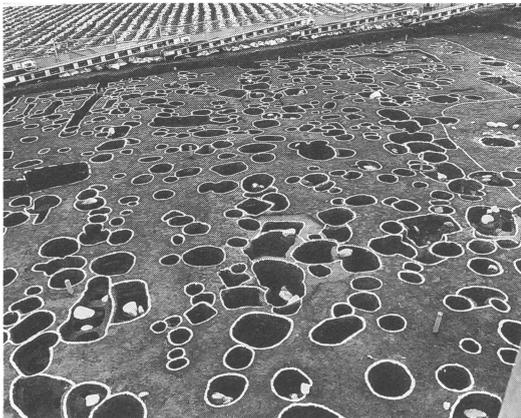
第3図 人面付土器実測図(1:2)

の柱穴は、調査区北部で多数検出されている。柱穴は黒ボク層を切って深く掘り込まれ、根石を残すものもみられる。建物の主軸方位は、 $N-75^{\circ}-E$ と $N-70^{\circ}-E$ の2種類が確認され、前者の建物は北側の溝と切り合っている。なお、この建物柱穴から鉄鎌が1点出土している。

調査区南部では、石組の井戸が検出されている。井戸の掘形は、直径約6mを測る。石組は上部が円形に組まれ、下部はほぼ正方形を呈する。上部の石組の直径は約1.8mである。検出面から深さ3.8mまで掘り下げたが、それ以下は激しい湧水のため最下部の構造は確認できなかった。井戸内は人頭大の礫により一度に埋められており、埋土上位から常滑産甕、土師器皿等が出土している。遺物の年代から、16世紀には廃絶されたものと考えられる。井戸東側には、長方形を呈する土坑が2基検出され、井戸埋土と同時期の遺物が出土している。



鉄鎌



掘立柱建物跡



溝内石垣



井戸石組



井戸断割状況

江戸時代 江戸時代には当地は島田氏の陣屋になるが、今回の調査では陣屋の敷地内を区画する溝と石垣が検出されている。昨年度の調査成果と合わせると陣屋の敷地内が南北に大きく3つに区画されていたことが明らかになった。

溝は幅3.0m、深さ1.0mを測り、断面形は箱形を呈する。石垣は調査区のほぼ中央で検出され、3段程遺存している。石垣の並びは途中にずれている部分があり、積み直し等の改築を受けたものと考えられる。西側の石列は人頭大の扁平な礫を水平に積み上げ、東側の石列は基底に大きな礫を配しその上に人頭大の礫を積み上げる等、築造方法に違いが認められる。

石垣の北と南から、それぞれ建物跡が検出された。石垣北の建物は掘立柱で、柱穴は径0.9mと大きく、黒ボク層を切って基盤層まで掘り込まれている。石垣南の建物は、柱穴の底面を固く叩きしめ、拳大の礫が密に敷き詰められている。

この他に調査区南部では、廃棄土坑2基、常滑産の大型甕を埋設した土坑4基を確認している。

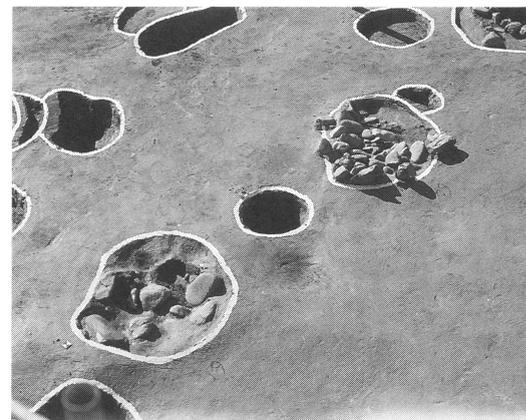
まとめ 今年度の調査では、昨年度の調査では希薄であった島田陣屋に関わる遺構が多数検出された。特に陣屋敷地内の区画、構造を窺うことができる資料が

得られたのは、大きな成果であろう。また、文献に記されていない戦国期の遺構、遺物も多数検出されている。陣屋以前に当地に屋敷地が存在したことは、島田陣屋の成立を考える上でも重要な意味をもつものであろう。戦国期の屋敷地は、遺構の切り合いからさらに複数の時期区分が可能であり、今後江戸時代も含め屋敷地の構造の変遷を明らかにすることは重要な課題と考えられる。

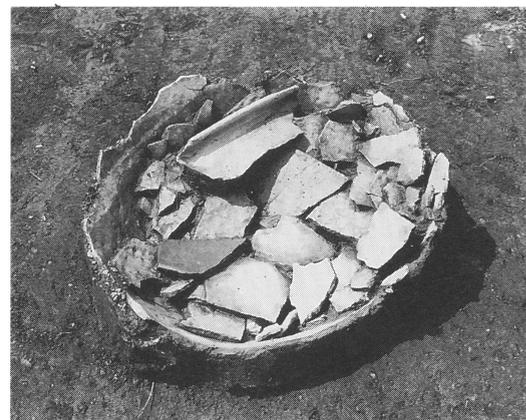
(原田 幹)



石垣



柱穴



埋設甕